

比較思想の道

「比較思想研究」に対する批判に答える

中村 元

比較思想学会が設立されてからすでに五年を経過し、その機関誌『比較思想研究』第五号が刊行されるに至ったことは、学会当事者としてはまことに喜ばしいことであり、御同慶の至りと思う。しかし盛んになるにつれて世間に批判の声もあることは見逃すことができないし、これについて反省してみる必要があると思われる。その批判がたとい誤解にもとづくものであっても、そのような誤解が何故起つたかということを謙虚に考えてみねばならぬ。世間には悪意ある批評というものも、他人を首肯せしめることをめざしての議論としての論理をもっており、あるいは論理の偽装をともなっているから、やはり批評を受ける人は謙虚に耳を傾ける必要があると思われる。

ただし、多種類ある比較思想研究に対する種々の批判に対して全面的に論及することは不可能であるから、ここでは比較思想学

会の機関誌『比較思想研究』に見られる諸主張、諸研究に対する諸方面からの批判だけに限って考えてみたい。

先づ第一の批判は、比較研究は正統的な従前の研究に対して従属的な位置しかもち得ず、その学的劣位は否定すべくもないという見解である。これは今日わが国の学界一般を根強く支配している見解であろう。だから学界で地歩を得ようとする人は意識的にこのような企図から遠ざかっている傾向が見られる。他方「比較研究」ということを表に出している人は、自分にとって不利なその事実を充分に覚悟しているようである。

しかしいわゆる「正統派の研究」とは、いったい何なのだろう。古典に述べられた内容を祖述し、解説し、その所論が古典の言わんとすることにひたすら合致しようとするというだけではなかるか？ 鸚鵡の発声とどこが違うのだろうか？ そこには批判や評

価の意図もなく、また余地がない。

例えば、今日「仏教研究」という名のもとに行われていることは、実際には、仏教文献に関する研究か、あるいは仏教上の人物の経歴に関する研究が主であるように見受けられる。しかし文献や経歴に関する研究は、「仏教に関連した研究」ではあるが、「仏教の研究」ではない。何となれば、文献や経歴に関する研究は、それ自体に内在する論理によって遂行されねばならず、そこに思想をもち込んで結論を導き出すための基準とすることは危険である。

（思想を手がかりとして原典批判を行ない、その原典批判にもとづいて思想史を叙述するのは、一種の循環論法となる。）文献に関する研究は文献自身にもとづいて判断を構成されねばならない。そうして思想に関する研究はそれとは次元を異にするものでなければならぬ。つまり「仏教文献研究」は「仏教思想研究」ではないのである。——たとい両者のあいだに密接な連絡があるろうとも、これは、他の文化圏の生み出した思想体系の研究についても同様に適合するはずである。

しかし人間の思想や感情を問題とする場合に、およそ意識するとう意識しないとに拘らず、比較なしに人間現象の研究は可能であろうか？ 人間に関する現象を記述するだけならば比較なしに行い得るであろうが、評価し批判するということになる、途端に比較を必要とする。一定の条件なり環境に対して、各人が、あるいはそれぞれの人間の集団が、異なった反応を示す場合に、その

差異を解明するためには、比較が必要となってくる。

さらに外国の思想を研究する場合には、その思想的所産が表現されるのに用いられたのと同じ言語を以て解明し論述する場合には、比較はそれほど必要ではないかもしれない。しかし他の言語に翻訳し、他の言語を以て解明するときには、研究者自身が、たとい公然と表明しなくても、すでに比較を行なっているのである。例えば、西洋の religion を日本語で表明するために、先学は苦勞して仏典の中から「宗教」という語を見出して、それをもって来てそれに充てた。この操作はすでに比較を内含している。そうしてそれと同時に religion は仏典における「宗教」と必らずしも同一ではないから、そこにズレがある。それが今後問題を残している。

日本の学者が西洋の術語を訳して新たに術語をつくった場合、原語がはつきりしておれば混乱も曖昧さも起らないというかも知れないが、西洋の原語自体がはなはだ曖昧である場合が少くない。experience, Erhaltung の意義だけでも数え立てると、三十近くあると言われているのではないか。原語がはつきりしているということは、必らずしも概念の明確判明なることを意味しない。いわんや、哲学者が「ヘロソス」というような曖昧な表現を使う場合には、概念の解明には役立たないが、こういうことが平気で行われている。

こういうわけであるから発生的にその成立の歴史を見る限り、

比較研究は従前のいわゆる正統派の研究に比して年次的に二次的であり、従属的であった。しかし研究の論理的な構造に関して見る限り、比較研究あるいは比較研究からさらにつき進んだ立場というものが基本的根底的なものであり、従来^のいわゆる正統的研究はそのために手段として使われる従属的なものにすぎない。経過的には煙が見えるからあそこ^に火がある^と知り得るのであるが (causa cognoscendi, jāpaka-heu) 実在するものの構造に關して^は、火があるから煙があるのである (causa essendi, jāpaka-heu)。複雑な異なった哲学思想が成立する根拠には、人知を以てしては容易に解明し得ない根源的な構造があるにちがいない。

哲学的諸學問に關するいわゆる「正統派」の學問が現在の學界では支配的であるが、従前においてはそれで良かったかもしれないが、今後の世の中においてそれは真実の意味において「學問」の名に値するであろうか？ 狭い地球の上で人間の生活圏が一つになりつつあるのに、異なった価値観や人生観が互いに対立し矛盾し抗争し合っているという状況において、學者は何らの解決を与え得ないのみか、与えようと努めもしないではないか？ こういう迫り来る現実の事實に対して目をつむつてなされている「研究」なるものが、今後の世界において學問としての意義をもち得るであろうか？

もちろん従前の多くの學者の行なっていたような研究が決して

無意義になるというのではない。ただそれらは今後現れるべき新しい思想体系に対して手段として役立ち、従属的意義をもっているというにすぎない。「身のほどを知れ」という、古代ギリシアや日本の封建時代の格言が新たな意味をもって来るのである。

二つの思想体系が置かれて^{いる}境位が似ている場合には、その両者について「比較研究」(comparative study)が容易である。しかしその置かれて^{いる}境位がいちじるしく跳び離れて^{いる}ときにはどうなるか？ この場合にも、やはり対比して、特定の問題意識について、あるいは特定の思维方法について、対比して研究することも可能であろう。これは従前の場合とは少しく意義を異にするから「対比的研究」(contrastive study)といふこともできるであろう。しかしこれも広義の「比較研究」の中に入れることは可能であろう。

この対比的研究の立場に立つならば、一般人が考えて突飛と思われるような二つの項について、結びつけて考察することが可能である。すでに三十年以上前の話であるが、哲學者が幾人も集まった懇談の席で、たまたま宗教哲學者である故・石澤照靈博士が天台とキエルケゴールに精神を打ち込んでおられる事實を問題として、故・伊藤吉之助先生が何気なくいわれた、「天台とキエルケゴールとはどう結びつくのかね。——天台とヘーゲルなら結びつくだらうが。」

何気なく洩らされたこのコメントは重大な問題を内含している。

第一に、天台とヘーゲルとの思想体系の内在的構造の類似を伊藤先生は或る意味で認められたわけであるが、理性的なものが現実的であると認めた点で、空海のほうがヘーゲルに近いと言えるのではないか？ 空海の六大縁起の思想は、とかく觀念論的傾向の強かった仏教思想の伝統のうちでは最も実在論的特徴を示しているが、しかしまたその背後にある精神的原理が究極のものであると考えている。

第二に、天台とキエルケゴールとの対比はいかにも突飛な印象を与えるわけで、石津博士がどういう点で両者に興味をもたれたか、ということについては、博士は何も言明されていないし、また本人から何ことも伺ったことは無い。わたくしにも長くは解らないが、しかしこういう研究的事実がある以上、同一人物としての石津博士が両者に興味をもたれるだけの根拠があったのではなからうか？ 例えば、天台は「悪」の問題を真剣に考えた。「十界互具」の思想によると、仏にさえも悪を犯すことが可能性の状態において存在するという。悪の問題に対決すると、キエルケゴールを思い浮べるのも理由のないことではないのではないか。実は突飛だと思われるところに問題を発掘することによって、既成の権威づけられた思想体系を破壊して、新しい思惟の芽を育てることになる。

いわゆる権威づけられた哲学思想研究なるものは、いずれか一つの伝統に準拠して、それを絶対視するところに始まる。最初に

そのような伝統を構成した人には悪戦苦闘があり、精神的な意味の「反逆」もあつたにちがいない。ところがその伝統が固定し定型化すると、それにしたがって研究する人には、伝統的思惟に対する疑いが無い。だから近年に日本に現われる多くの研究は、海外における思惟方法あるいは研究方法に対する無批判的な服従であり、盲信であるという印象を与えるが、しかもそれが「学問」として通用している。

このようなクリシェを破壊する最初の手がかりが「比較」である。わが国では比較研究を叫ぶ声が盛んだといわれるが、わたくしはそうは思わない。例えばアメリカでは、「東洋哲学」の研究とはすなわち「比較哲学」のことである。だからアメリカとカナダには「The American Association for Asian and Comparative Philosophy」というものが成立していて、多くの会員を擁している。ところが日本では、うっかり「比較」というと、学界からはじき出される、と多くの学者が理解している。

日本の哲学的な諸学問の大きな欠陥は、人間の生きること、人間の思考・感情の諸様相の生きた体系を、そのものとしてとらえようとせず、細分化してしまつて、人間そのものを見失っていることである。いわば生体解剖をした死体の局部局部を研究しているようなものである。遠いヨーロッパの例をとってみても、カントやヘーゲルは、論理学だけ、美学だけ、倫理学だけの学者ではなかつた。近くアメリカに例をとってみても、デューイ、マッキ

「オン、モリスなどの独創的な諸哲学者は、日本の学問区分ではどこにもあてはまらない人々である」ところが日本ではこまかに学科の区分をたてて、考究している。これはまさに日本に顕著なお役所の縄張り根性に対応するものであらう。

わたしはたまたまわが国における学科別によると、「印度哲学」に属することになってはいるが、外国の諸大学には「印度哲学」という学科はない。それは外国の諸大学に「倫理学」などという学科が無いのと同様である。もしも学問の分野を細かに分け、他のものから排除されたインド哲学独自のものを求めるとすると、「インド哲学書に関する文献学」以外には無いことになってしまふ。

日本の哲学的諸学問は不幸な境位に置かれている。いわゆる正統派的研究なるものは、「あぢら」での研究を祖述しているだけということになるのではなからうか。本気に研究しておられる方は、そうではない、と言われるかもしれないが、局外者であるわたくしにはどうもそのような印象がとれないのである。

この膠着状況を打破するものは、まさに「比較思想」である。異なった文化圏に属する二つの項を比較するということも充分に意義を有するであらう。しかしまた比較を手がかりとして「比較それ自体が解消してしまふ」ような新しい道も考えられる。それは真実の学問をめざす道である。類似した例をもち出すと、*vergleichende Religion* が解消して *Religionswissenschaft* を

新たに成立させつつあり、*comparative philology* が解消して *General Linguistics* が成立したようなものである。それはまた比較を可能ならしめる深層的な基本構造を説明することにもなるであらう。

比較思想というものは、従来の哲学的諸分野の研究とは次元を異にしたものである。それは新しいものをめざす道である。より高くより広い立場に立って反省するということ、いやでも応でも「比較」の立場をとることになる。自分で考えるという立場をとると、考えるための手がかりとして比較の立場をとらざるを得ない。

比較思想論から比較思想の学へ進まねばならぬという主張もあるが、それは、日本知識人の大好きな既成の「学」という觀念にとらわれすぎていると思われる。外国語でいえば、どちらも *comparative philosophy*, *Vergleichende Philosophie* である。(わたくしの卒業したのは、「東京帝国大学文学部印度哲学梵文学科」であり、「学」という字が四つも出て来る。英語やドイツ語に訳してしまつと「学」という語は一回も現れない。「学」という字をやたらに使つたところには、明治の一部の官僚的知識人の一般民衆を見下した権威至上主義的な態度が認められる。と言つたら過言であらうか。ドイツ哲学に就いて基本的な問題の一つを提供する「*Wissenschaftslehre*」を「学」の好きな日本知識人はいったい何と訳すのびをさうか。「学問論」と訳すと、それ

は「学」ではないのであろうか？（アメリカでは“axiology”という難しい術語を使う学者もいるが、その同一人がまた“outline of knowledge”という平易な表現で「学問論」を述べている。）

『比較思想研究』の中に現われた研究論文は必らずしも二つの項を比較したものではないものが相当に存する。しかし二つの項を比較しなくても、異質的なものを意識して、研究対象に向って肉迫している場合には、それでよいとわたくしは思っている。その場合に、研究者自身の思惟が研究対象としての思想的所産と異質的なものでありさえすれば、それでよいのである。しかし、対象をただ賞讃し、祖述するだけのものは、そこから除かるべきであらう。

わたしは『比較思想研究』（既刊四号）のうちに掲載された論文がすべてよいと言おうのではないし、またいずれかの論文を弁護するつもりはない。ただ外部から加えられた批評を批判することにも内に顧みて反省して、今後のこの学会の発展を念願するために、この總會において所見を述べた次第である。あとの展開はそれぞれの会員諸氏にお任せしたいと願っている。

比較思想の研究が手がかりとなって、自分で考え、自分のことばで表現した新しい哲学の出現を切に期待する次第である。

（なかむら・はじめ、インド思想史、東京大学名誉教授・東方学

院長）